

フチャール

No.95

2026. June

特集

インタビュー



家族の多様化、

「つながり」のこれから

家族社会学者・永田夏来さん P2



『家族と住まない家』の著者に聞く、

人との関わりのなかで心地よく暮らすコツ・・・ P5

『府中市パートナーシップ宣誓制度』利用者に聞く家族観・・・ P6

キラメキビト ～まちで活躍する女性を紹介～・・・ P8

「フチャールの情報資料室より」本紹介・・・ P9

登録団体連絡会通信りぶる～「フチャール」登録団体紹介～ P10

府中市の男女共同参画のあゆみと情報誌の変遷・・・ P11



ムサシノキスゲが鮮やかに彩る、5月の都立浅間山公園。

毎年恒例の「キスゲフェスティバル」にはたくさんの人たちが集い、植物や野鳥の探索・どんぐりや葉っぱを使った作品作りを楽しみます。世代を超えたつながりが、府中のあちこちでも生まれています！

府中市男女共同参画センター
フチャール

発行：男女共同参画センター「フチャール」
（府中市市民協働推進部 多様性社会推進課 男女共同参画推進係）
制作：NPO法人エンツリー

家族の多様化、

「つながり」のこれから



永田 夏来さん

兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授

これまでは家族のあいだで担われてきた、「支え」や「見守り」といった役割。

しかし家族のかたちや、家族観そのものが多様化している現代、今までと同じ役割を家族に求めることは難しくなっています。

たくさんの人と人とのゆるいつながりの中へ役割を分けていく。そんなつながりの在り方について、家族社会学を長年研究されてきた、永田夏来さんにお話を伺いました。

1 「どこまで」が家族？



『サマーウオーズ』という映画を観たことがありますか？ 田舎の一軒家に親戚一同が集まり、みんなで力を合わせて困難に立ち向かう。いわゆる「古き良き家族」が描かれています。

この映画の公開は二〇〇九年ですが、それよりかなり前から、社会学者の上野千鶴子さんが『ファミリーアイデンティティ』という考え方を提唱しています。どこまでが家族の範囲なのか、誰を家族と思っているかは一人ひとり異なる、という議論です。

——いここはどこまで集まる『サマーウオーズ』のような家族のかたちは、今ではあまり見られなくなりましたね。

そうですね。戦後の日本では、田舎から都会へ人が多く移動してきました。きょうだいの多い世代では、家を継ぐ長男以外は高度経済成長の時期に地方から都会へ出てきて、それぞれが結婚して子どもをもつ。そうやって新しい家族を作っていました。

その結果、血縁であっても離れて暮らしている人が増えて、中にはあまりよく知らない親戚もいます。「これまでの日本の家制度や、血縁や姻戚の力が弱まってきているのではないか」「家族の範囲ってどこまでなんだろう？」という議論が出てきたわけです。

それまで自明だった「血のつながりこそ家族」という考え方が揺らぎ、「一緒に暮らし、同じ時間を過ごし、気持ちがつながっていることが大事」という感覚も広がってきました。家族のかたちが、人によって違っていていい、という見方が出てきたわけです。たとえば人間でなくても、ペットも大切な家族の一員だよ、と言われるはじめたのもその流れです。

2 自由に選べる、とは限らない

——上野さんの議論からおおよそ三〇年、現在の家族のかたちはどのように変化しているのでしょうか？

多様化が進んでいますね。離婚や再婚が増え、それに伴いシングルマザー・シングルファザーやステップファミリー（※）も増加しています。また同性同士のカップルも、パートナーシップ宣誓制度などで認知が進んでいます。

かつてのように、血のつながりや法的つながりで家族を語ることができないんです。

※子連れ再婚による血がつかない親子関係をもつこと。

——いろいろなパターンがあつて、これが家族ですと言えるものがなかなか見つからない。それが「多様化」ということなんですね。

多様性はもちろん歓迎すべきことなんですけど、だからといって差別がなくなっただけではない、ということには注意が必要です。



たとえばシングルマザーの方を考えてみましょう。

就労しても非正規雇用が多く経済的に厳しい立場に置かれやすい、住宅探しでも不利になるなどの問題に直面することがあります。これは「女性だから」だけでも、「ひとり親だから」だけでも、「経済的に余裕がないから」だけでも説明しきれない。複数の構造的な不利が重なり合って、特有の困難が生まれているわけです。

こうした見方を『インターセクショナルリティ（交差性）』といいます。

家族のかたちが多様化したからといって、誰もが自由に選べるようになったとは限りません。選択肢が増えることと、その選択が支えられているかは別の問題です。

——同じ立場の仲間も見つけづらそうですね。

そうですね。同じシングルマザーといっても、雇用形態も子どもの年齢も住んでいる地

域もバラバラ。一つの属性が共通しているからといって、抱えている困難は同じではない。だからこそ、画一的な支援ではなく、それぞれの状況に応じた仕組みが必要になります。

3 自分で選ぶ、つながりのかたち

これまでの「家族」とは、その存在によって人生に必要なものが全部ひとまともに手に入る仕組みでした。結婚すれば子どもも育てられる、話しも聞いてもらえる、老後も安泰である……。

でも現在は、結婚のかたちひとつとってもバリエーションが多く、抱える問題も違います。家族さえいれば、その中で太く強いつながりを築いて、人生の安心安全が確保できるということではなくなっていました。

——今では結婚しない、子どもを持たない人も増えていますよね。

そうなんです。だからこそ、性愛・育児・ケア・経済を全部一人の相手と共有するという結婚モデルにこだわらず、それぞれの機能を別の関係や仕組みに少しずつ分けて配置していく。話し相手は誰、困ったときに頼れる人は誰、生活の場をどう整えるかなどについて、当事者が自分で組み合わせていく。そういうつながりの作り方が大切になってきていますし、すでにあちこちで実践されています。

では具体例を見てみましょうか。

私は、いわゆる『普通の家族』のかたちにおさまらない暮らし方をしている人たちを調査しています。

その中のひとつに、神戸市長田区の多世代型介護付きシェアハウス「はっぴーの家ろっけん」というところがあります。サービス付き高齢者向け住宅と地域に開かれたコミュニティスペースが組み合わさった場で、

子ども・大人・高齢者・地域の人たちがぎやまぜに集まっています。

たとえば近くの喫茶店のおばちゃん、自分のところで読み終わった新聞をこのスペースへ持ってくるんです。そのついでに、そこにいる人たちとちよつと話をする。

その場に集まった人たちで、なんとなく声をかけたり、またはかけなかったり。みんなが自由に過ごす空間があって、無理しておしゃべりするわけではなく、自然に顔見知りになっていく。大勢の人のまなざしが、日常の中に自然にあります。

「見守る」「見守られる」というケアは、これまでは家族のなかに閉じられてきました。

でもこれからはおせっかいすぎないつながりを、地域の中でいくつも作っていく時代だと思います。自分にとって居心地のよいつながりのあり方を、自分で選んで作っていくことができるという安心感。そこに地域社会の可能性があるのだと思います。



写真提供：はっぴーの家ろっけん



4 同じ時間を、遠くの人と

——確かに地域でたくさんの方との関係を作るのは大切なことですね。でも自分のことに置き換えると、まあ挨拶くらいはいいけれどそれ以上はちょっと……。そもそも知らない人と話すのは苦手だし、近所だからこそ話したくないこともありますしね。

なるほど。では、いつも同じ場所にいないでも、時間や経験を共有することで生まれる関係性はとうでしょう。今は移動も通信もしやすくなり、離れた場所同士でつながりを保つことが現実的になっています。

これはまさに今、私が研究していることで『トランスローカリティ』といいます。地域に根ざしながらも、遠く離れたところともダイレクトにつながり、影響を与え合っている、そんな生き方や関係性のあり方を捉える考え方です。

身近な例だと、二拠点生活でしょうか。平日は都市部、週末は地方というふうな、二つの場所を行き来しながら暮らす人たちが増えています。どちらも本拠地で両方の場所にちゃんと生活があって、両方の場所ですとつながっている。そういう生き方が現実的になってきています。

——地元と都会、両方に居場所があるという感じですね。

そうですね。いっぽうで、場所を行き来しなくても、離れたところにいる人と同じ時

間や気持ちを共有する、というつながりもあります。たとえば推し活。同じ人を応援しているという、推しを介したファン同士の関係。日本中、世界中にその人のファンがいて、それぞれが匿名のアカウントで配信を見ている。直接の知り合いではないけれど、同じ時間を同じ気持ちで過ごしている。これまでにはなかったつながりのあり方です。

……実は私、フジロックフェスティバルに三〇年近く通い続けておりまして。フェス当日にしか会わない友達というのめたくさんいます。

このあいだ、そういう友達のひとりから子どもの大学進学相談にのってほしいと頼まれました。

あんなにちっちゃくて、折り紙に「なっちゃんいつもありがと」ってお手紙を書いてくれていたあの子が大学受験！ なんだかびっくりですね。大きくなったんだなあ、しみじみ。

その友達は北海道で私は兵庫。住んでいるところは離れていて、一年に一度フジロックで会うだけ。SNSで互いの近況はなんとなく知っている……というような関係です。

それでも、私が大学に勤めていて全国の進学状況を知っていること、またその子が小さいときから面識があつてというタイプなのかということを知っていること。そういうことを踏まえて、私に相談してくれたわけですね。

頻繁に毎日連絡を取り合っているわけじゃないからこそ、適切な距離を保って頼ったり頼られたりできる。こうした関係も、

家族や近所付き合いとは違う、これからの大切なつながりのかたちなのだと思います。



5 「つながり」のこれから

——これまで家族が担ってきた機能を、別のかたちで広げていけば、家族だけに依存しないつながりを作っていけるのですね。

一方で、「家族」というかたちが大切にされ続けているのも事実です。永田先生にとって、家族にしかないもの、家族の核にあるものは何だとお考えですか？

私が考える家族の核は、『一緒に時間を重ねて、変わっていくこと』だと思います。

学校や病院のように、特定の機能を担う集まりは、課程を修了したり病気が治ったりすれば関係が終わります。機能が定まっていって、中の人が入れ替わっていく。

でも家族は、長い時間を共有しながら、その時々で求められる役割が変わっていく関係です。子どもを育てる時期、自分が病気になる時期、親や配偶者の介護をする時期。そうした節目を一緒にくぐり抜けてきた相手がいるというのは、家族のかけがえない側面だと思います。

入院したときにお見舞いに来てくれない、自分が大変な時期に話も聞いてもらえない、病気で休職しているのに気にもか

てくれない……。起こった変化に寄り添ってくれなかったときに、人は家族に対して深く失望するのではないのでしょうか。その人がどんな状況になっても並走してくれる人がいる。それが家族の核にあるものだと思います。

ただ、それは家族の中だけで担われるものとは限りません。近所に住む顔見知りの方、インターネットでつながっている友達、フェスで一年に一度会う仲間。そういう人たちもまた、その人の変化を見守ってくれる存在になります。

結婚さえすれば、家族さえ作れば、人生の安心が確保される。すでに、そういう時代ではありません。だからこそ、その人の変化や挫折、立ち直っていくプロセスを、家族の中だけでなく、いろいろな人やいろいろな場所で見守れる社会を作っていくべきですね。

〈取材・文・写真：神名川佳枝〉



『家族と住まない家』の著者に聞く、 人との関わりのなかで心地よく暮らすコツ



島村 八重子さん

「全国マイケアプラン・ネットワーク」代表

府中市在住。1954年東京生まれ。義父の在宅介護と看取りをきっかけに福祉、高齢者介護に関心を持つようになる。情報誌の編集に携わったのちフリーライターに。2001年、介護保険のケアプラン自己作成者に呼びかけて「全国マイケアプラン・ネットワーク」を立ち上げ、代表をつとめる。著書に『介護のための安心読本』『福祉マンションにある暮らし』（共著）他。

「この本では、戸籍や血縁で繋がる家族ではない人たちと一つ屋根の下に暮らす人々の様子がインタビュー形式で描かれています。登場する人々は、その暮らしが心地よく、とても満足しているようです。どうしたら、そのように充足した暮らしができるのでしょうか？」

著者の島村八重子さんにお話を聞きました。

他人との繋がりを持つことができる家を求めて、積極的に行動する人達。島村さんはそんな人達に興味をもち、執筆に至ったそうです。

「インタビューをした方は全員が自立されていました。そして、必ずしも、そこを最終の家と考えているわけではなく、より自分らしく暮らすことができる環境へのステップアップの場として捉えていますので、今もそこに住んでいる人もいれば、別の場所へと移った人もいます。」

本書に登場する家は、コレクティブハウスやシェアードハウスです。プライベートな空間を確保したうえで、共有スペースを使うように設計され、生活の中で他人との関わりを保つことができる共同住宅として運営の仕組みも工夫されています。「他人と

楽しく生活するには距離感も大切。それは家族の間にも言えることです。」

出版から二〇年。島村さんは人と人との良好な関係を築くためには、もうひとつ大事なことがあると考えます。それは、自分自身が持つ「普通」の枠を抜けることです。

島村さんは、介護保険のケアプランを利用者が主体的に考える「全国マイケアプラン・ネットワーク」の代表として、これまで多くの人達の相談にのってきました。老若男女を問わず、国籍を問わず、様々な価値観をもつ人達と関わる経験を経て、島村さんの普通と考えていた枠が大きくなりました。それに伴い、他人の言動にも寛容になり、人との関わりにストレスを感じる事が少なくなりました。

性別や年齢を問わず、国籍を問わず、さまざまな価値観をもつ人達と関わる経験を経て、島村さんは「人によって『普通』だと思ふことは違う」と気づきました。自分にとってのあたり前を押し付けるのではなく、「普通」だと考える枠を大きくすることで、他人の言動にも寛容になり、人との関わりにストレスを感じる事が少なくなるのです。

適切な距離感を保つこと、ほかの人にとっての「普通」を認めること。それが、多様

な人々と関わりながら心地よく暮らしていくために大切なことなのです。

そんな島村さんの視線は、現在、家という枠から地域へと向けられています。島村さんは、誰でも気軽に座れるように家の前にベンチを置き、通りがかりの人達が休憩しながらそこで会話が生まれているそうです。

人の縁が繋がっていく、そんな地域を目指しているのです。

〈取材・文：児嶋直子 写真：渡辺幹一郎〉



『家族と住まない家』

著者：島村八重子・寺田和代
春秋社

『府中市パートナーシップ宣誓制度』

利用者に聞く家族観



『府中市パートナーシップ宣誓制度』を利用されている「たかしさん」と「けんさん」のお二人に、多様性の時代と言われる現在に至るまでの歩みや、家族観についてお話を伺いました。

府中に住んで

——たかしさん「四〇数年前に府中市で二人暮らしを始めたころは、社会的に多様性という言葉もありませんでしたから、あからさまな嫌がらせを受けました。

例えば、ガラス片を挟んだ新聞紙や、いかがわしい広告をポストに入れられるといった、どれも子どもじみたことなんですけどね。それでも、まだ我々はましなほうでした。

知り合いの中には玄関のドアにペンキで落書きされたこともあったそうで、それを消すのが大変だったという話も聞きました。

嫌がらせを受けながらも何度か引っ越しをするうちに、あることに気付きました。

初めは色眼鏡で見られて嫌がらせを受けても、近所と時間をかけて付き合い、私たちの人柄を知ってもらえれば、受け入れてもらえるということです。

そこで、賃貸住宅だと短期間で引っ越し人が多い一方、分譲住宅なら互いに長期間にわたって住むことになるので、さまざまな面で顔を合わせる機会が増え、関係を築きやすいのではと考えて、住宅を購入しました。そうすると、ゴミ出し時にあいさつ

『府中市パートナーシップ宣誓制度』とは……

一人一人が互いに人権を尊重し、多様性を認め合う共生社会の実現を目指し、府中市では平成31年（2019年）4月1日より実施している宣誓制度で、一方又は双方が性的マイノリティである2人の関係について、パートナーの関係にあることを証明する制度です。



府中市パートナーシップ宣誓制度HP

をする程度だったのが、毎日顔を合わせるうちに雑談までできるようになったんですよ。」

パートナーシップ宣誓制度を利用しようと思ったきっかけーお見舞いにも行けないー

——たかしさん 「あるとき、けんさんが入院することとなり、病院で私たちの関係をどのように説明すればよいか、困ったことがありました。婚姻関係が親族でなければ、病状などの詳しい話が聞けないどころか、お見舞いにすらも行けない状況になりかねなかったんです。

そのときは何とか対応しましたが、これから歳を重ねる中で社会制度を利用せざるを得ない場面も多くなることが予想できます。どれだけ一緒に暮らしていても法律上は他人になってしまいます。自分たちは

家族なのだと、少しでも証明できるものが必要だと感じ、『府中市パートナーシップ宣誓制度』を利用しようと考えました。」

パートナーシップ宣誓をした後の変化ー家族として認められたー

——たかしさん 「宣誓をする前は、どこか社会から認められていないという感じがありました。宣誓の際に市の担当の方から『おめでとございます』と言われ、公的にカップルとして認められたようで、すごく嬉しかったです。」

——けんさん 「宣誓をしたことで、家族として守るべき責任感や、相手を思う気持ちが一層強くなった気がします。これまでは事実と異なる関係性を伝えることも

ありましたが、パートナーシップ宣誓の受領証を見せることで、ある程度の理解を得られるのは大きいですね。」

——たかしさん 「とはいえ、宣誓をしたからと言って、全ての問題が解決するわけではありません。例えば、相続です。持ち家の場合、法律婚の夫婦であれば、名義人が亡くなると配偶者が相続します。しかし私たちの場合、たとえ共同名義であっても亡くなった側の相続人が引き継ぐことになりません。残されたパートナーが住み続けるためには、いろいろな法的手続きが必要なので大変です。」

お二人にとって「家族」とは

——たかしさん 「男同士だからといって特別なことは何もありません。一緒に生活していれば、色々あります。」

異性だからとか同性同士だからとかは関係なく、ごく普通にたわいもないことで喧嘩もします。このあいだも、ガスのスイッチを切つてないと小言を言われて喧嘩になりましたね。」

——けんさん 「喧嘩しても、お互いに尊敬し信頼しているから、時間が経てば自然と許してしまう。それが家族ということではないでしょうか。」

〈取材・文・写真：渡辺幹一郎〉



「出会ってよかった」と思える幸せを



かどやアニマルホスピタル院長
門屋 美知代さん

犬や猫のそばにいたい！

子どもの頃から犬も猫も大好きで、動物のお医者さんになるのが夢でした。

獣医学部を卒業して獣医になってから、しばらくは動物病院に勤めていたのですが、もっと勉強したくて東京農工大学大学院に入りなおしたんです。

獣医免許をとったあとの就職先として、病院に勤務する人も多いし、公務員や研究職、製薬会社などの民間企業に勤めるなどいろいろな選択肢があります。

でも私は、開業医になりたい、自分はそれが向いているんじゃないかなと思っていました。とにかく犬猫にさわっていたい、そばにいたいです。それが幸せなんです。

開業する場所は農工大の近くにしたい、この場所を選びました。大学から徒歩十分くらいなので、重症だったり大きな手術が必要だったりする場合には、すぐに農工大の大学病院を紹介することができます。

自分の母校なので知り合いがたくさんいて、連携がとりやすいです。二〇〇五年に開業したので、もう二十年になりますね。

できるだけ多くの診察を

飼い主さんのお仕事が終わったあとや、お休みのときに動物を連れてきやすいように、平日は二〇時まで、土日祝日も診察しています。

予約制にはしていないので、混んでいるときに来院された飼い主さんの中には不満に思う方もいらっしゃるかもしれません。逆に暇で、こちらの手が空いてしまう時間もあります。

ただ予約制にすると、予約してから診察まで数日後とか、数週間後とかになる可能性もありますよね。

それで手遅れになったりしないように、一例でも多く診たいんです。だから悩ましいところですが、今のスタイルでいいかなと思っています。

それぞれの飼い方に寄り添って

若い頃はセミナーや学会に行つて、とにかくたくさん勉強しました。確定診断にこだわって、検査をして病名や症状を特定することを重視していたところがあると思います。

今ももちろんきちんと診断することは大切になっていますが、あわせて飼い主さんの気持ちに寄り添うこともとても大事だと思ふようになりました。

飼い主さんによって治療に対する考え方や、経済状況はさまざまです。苦痛を与えたくないから注射はしたくないという方もいるし、高度な医療を受けたいから大学病院を紹介してほしい、高額になってもいいからという人もいます。そこを見極めて、ご本人が後悔しないように納得のいく選択をサポートしています。

犬猫に出会った人生って、とても豊かですよ。最終的には寿命がきて亡くなってしまふんですけど、それでも振り返ったときに、その子と出会えたことに喜びを感じてほしいです。病気になって亡くなってしまうなら飼わなければよかった……ではなくて、病気になったけれども最期まで精いっぱい寄り添ってあげられてよかったと思つてほしい。

これからは動物の健康寿命を伸ばすために、予防診療や健康診断に力を入れていきたいです。ただ高齢になると、人間と同じでどうしても体調を崩してしまいがちです。

病気になってしまったわんちゃんや猫ちゃんも、一日でも長く飼い主さんと幸せな日々を過ごしてほしい。それが一番の願いです。

〈取材：文：神名川佳枝〉



かどやアニマルホスピタル

府中市府中町1丁目40-12
042-334-5559

「フチュール」の情報資料室より ～市民ライターがおすすめの本を紹介します!～

「フチュール」の情報資料室では、小説・エッセイ・絵本など、男女共同参画に関するさまざまなジャンルの書籍や雑誌を揃えています。

市民ライターの二人がそれぞれ興味をひかれた本を選び、内容を紹介します。



『ピンクがすきってきめないで』

文・ナタリー・オンス、
絵・イリヤ・グリーン、
訳・ときありえ、
講談社

『ピンクがすきってきめないで』
って私のこと？

初めて「フチュール」に行ってみました。「男女共同参画センター」という施設だと意識したことがありませんでしたが、面白そうな絵本や書籍もあったのでいくつか借りてみました。その中でも一番共感したのが絵本『ピンクがすきってきめないで』です。

主人公の「わたし」は女の子だけど黒が好き。木登りも虫も恐竜も、特にクレールン車が好き！弟は人形が好きで、人形に服を縫って着せています。

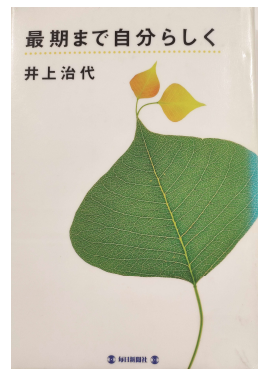
でも、わたしは女の子だし弟はちゃんと男の子です。

……私も幼いころ母が着せてくれるピンクやフリルの付いた服が好みじゃなかった。反動で思春期には黒の服が多かったつけ。など親近感が湧きました。絵本の中で「わたし」がした「どうして女の子は男の子のものをすきになっちゃいけないの？」という質問に、親が「そうなっているから」と答えますが、ああ私も同じようなことを言われたなど記憶が蘇る……。全く「そんなのこたえになってないよ」です。

多様性の時代と言われる現代でも、古い価値観に囚われたり、押し付けられてしまうことはあります。それでもできるだけ、自分の心はしなやかに、自由でありたいと思っただお話でした。

面白い絵本との出会いだったと、ちょっと嬉しい。次は他の本も読んでみようと思います。

〈文: Ayako.S〉



『最期まで自分らしく』

著者・井上治代
毎日新聞社

あたたかな目線でひもとく
「葬送」の案内書

タイトルからいわれる「終活のススメ」を想像されるかもしれませんが、その印象をやわらかく覆す一冊。葬儀や納骨の多様なかたちや生前準備、海外の葬儀事情などの具体的な情報が詰まっているだけでなく、葬送をめぐる人と人との温かな交流が丁寧に描かれています。

新聞連載をまとめた構成で、一話完結の「ショートストーリー」のような感覚で読みすめられるため、一編ごとにさまざまな感情が余韻となつて残ります。

連載の読者から寄せられたお便りも随所に紹介されており、他者の視点にふれながら自分の考えを確かめ、深めていくことができます。

人生の中で誰かを見送り、いつかは送られる側になる私たち。

「意思を残すことは、残された者への思いやりであり愛情表現」という本書のメッセージに、自分や身近な人の「最期」と向き合う勇氣をもらった気がしました。

〈文: 伊藤 薫〉

「フチュール」では、
本の貸し出しを行っています。

※市民、市内在勤・在学の方のみ。初回は利用登録が必要です。3冊まで2週間借りることができます。
返却は当センターの受付カウンターへお願いします。
詳細は府中市ホームページをご覧ください。
「フチュール」へお問合せください。



府中市ホームページ

笑いが広がる、エンジョイニングの時間



「エンジョイニング」代表
加藤 良江さん

「はい、いきますよー!」

軽やかな声かけとともに、会場に笑いが広がります。グーチョキパーに合わせて手を動かすシンプルなゲーム。それだけなのに、自然と笑顔になってしまします。

府中市内で活動を続ける「エンジョイニング」は、頭と体を使うゲームを通して、人と人がゆるやかにつながる場を作っています。

代表の加藤良江さんは、「年齢や経験を問わず、誰もが気軽に参加できることを大切にしています」と話します。取材当日は、花柄のブラウスにピンクを基調とした装いで、その明るい雰囲気自然とその場をやさしく包んでいました。

プログラムは、失敗しても大丈夫という安心感を大切にしながら進みます。

加藤さんは、うまくいかない経験が脳を活性化させると話し、ゲーム中にも「失敗した方が、脳が活性化するからいいんですよ」と声を掛けています。

さらに、参加者が緊張しないよう、輪になつてのウォーミングアップから、スキップ、頭の体操、集団ゲームへと、4つの順番を意識して組み立てられています。初めての人でも無理なく参加できるよう工夫されており、「おもしろい」「またやってみたい」と感じられることが大切にされています。

この日は十一人が参加。時間が進むにつれて笑い声が重なり、空気がやわらいでいきました。中でも、ハイパーピンポンでは会場がひととき盛り上がりを見せました。ハイパーピンポンは、通常の卓球と違いネットの下でボールをやりとりします。ボールがラケットに当たりやすく、初めての方でも楽しみやすいのが特徴です。チームで声を掛け合いながらボールをつなぎ、自然と一体感が生まれていました。

「エンジョイニング」という名前には、「楽しむ」と「つながる」という思いが込められています。年齢や性別を問わず、誰もが安心して過ごせる場をつくること。それが男女

共同参画社会の理念と重なっています。

加藤さんが何よりうれしいと感じるのは、参加者の変化です。「来たときと帰るときで、表情が全然違うんです。少し緊張していた表情が、帰るころにはやわらぎ、目が輝いている。その変化を見る瞬間に、この場の意味や、人と人がつながることの力を実感します。」参加者同士が自然に声を掛け合い、笑い合う姿を見ることが、活動を続けてきた大きな原動力になっているそうです。

安心して過ごせる空気と、自然に生まれるやりとり。その一つひとつの積み重ねが、人の心をゆつくりとほぐしていく。エンジョイニングには、そんなあたたかな時間が流れていました。

〈取材：文：M.Hayashi 写真：神名川佳枝〉



みんなで力をあわせて、
ハイパーピンポンに挑戦!

エンジョイニング

「エンジョイニングゲーム」
(みんなの認知症予防ゲーム)を
通じて、認知症になってもそう
でなくても暮らしやすい、安心
して過ごせる、つながりのある
町づくりを目指しています。

「フチュール」に団体登録しませんか?

男女共同参画センター「フチュール」は女性問題の解決や男女共同参画社会の実現を推進することを目的として設置されている施設です。この目的に沿った活動をする団体及び男女共同参画センターと協働して事業を実施することが考えられる団体を登録し、その活動を支援しています。

令和8年度登録団体連絡会役員会 役員団体

「特定非営利活動法人 脳響トーンシステム」「府中女性防火の会分梅支部」「ヒップファミリークラブ四谷」
「和文化研究会 倶々楽」「にじの子育て会」「府中市助産師会」「分梅町自治会連合会」「渋」

※登録団体連絡会役員会は、登録団体同士の連携や交流を深め、男女共同参画の推進を実現することを目的として活動しています。

団体登録については
こちらから
府中市ホームページ



男女共同参画センター所長よりご挨拶



平野所長

情報誌フチュールは、令和8年度より誌面をリニューアルしてお届けいたします。

誌面では、地域で活躍する女性のロールモデルや男女共同参画の推進に取り組むリーダーの紹介、世界各国の男女共同参画の状況など市民の皆さまに、より魅力的で読みやすい内容で、年2回（6月・10月）お届けいたします！ぜひお手に取ってご覧ください。



男女共同参画センター「フチュール」

府中市の男女共同参画のあゆみと情報誌の変遷

本市の男女共同参画情報誌は、昭和60年（1985年）に婦人問題啓発誌デュエットが創刊され、令和7年（2025年）に40周年を迎えました。本市の男女共同参画のあゆみと共に情報誌の変遷を振り返ってみましょう。

府中市の男女共同参画情報誌は、今年で95号になるよ！



▲スクエア21からフチュールに改題！

40

令和7年（2025）

第7次男女共同参画計画策定

令和6年（2024）

市制70周年
男女共同参画センター30周年
男女共同参画都市宣言25周年

令和元年（2019）

府中市男女共同参画センター「フチュール」に名称変更
府中市男女共同参画センター情報誌フチュールに改題

平成13年（2001）

登録団体連絡会発足
登録団体連絡会通信「りぶる」発刊

平成11年（1999）

府中市 男女共同参画宣言

10

平成7年（1995）

スクエア21・府中市女性センター開設
府中市女性センター情報誌スクエア21に改題

昭和63年（1988）

第1回 府中市女性フォーラム開催

昭和60年（1985）

婦人問題啓発誌 デュエット創刊



▲デュエットからスクエア21に改題！



▲情報誌第1号デュエットを創刊！





フチャール・インフォメーション

女性問題相談

日々の暮らしの中で、困ったり、悩んだり、つらい思いを抱えていたり…そんな時にどんなことでも、お話するところから始めてみませんか。悩みをひとりで抱え込まず、相談することで気持ちが楽になったり、解決法が見つかったりするかもしれません。一緒に解決の糸口を探していきましょう。あなたのプライバシーを固く守ります。また、必要に応じて他の専門機関をご紹介します場合もあります。原則として市内在住、在勤、在学の方が対象で、性別に限らず、どなたでもご利用いただけます。



相談可能な曜日と時間

	月	火	水	木	金	土
午前9時～午後5時	対面・電話	対面・電話	対面・電話	対面・電話	対面・電話	電話
午後6時～午後9時	—	—	電話	—	電話	—

※正午～午後1時及び日・祝日・男女共同参画センター休館日を除く

<相談時間>1回につき50分

<相談方法>対面のほか、電話での相談も可（予約の方優先になります。）

<相談予約>オンラインのほか電話（042-351-4602）にて受付

※オンラインで予約できるのは、電話相談のみです。対面相談をご希望の方は電話でご予約ください。



オンライン予約フォーム

協働講座 団体募集

～フチャール登録団体だからこそできる、協働のカタチ～

府中市男女共同参画センター「フチャール」では、登録団体に企画・運営していただく講座を募集しています。団体の自主活動をフチャールの講座に活かしてみませんか。フチャールからのサポート内容や申請方法などの詳しい情報は、府中市ホームページをご覧ください。フチャールまでお問い合わせください。

応募期間 講座開催6か月前から

開催時期 令和8年5月～令和9年2月の間で開催される講座

講座内容 団体会員以外の一般の方も参加できる内容であること。団体会員のみでの活動など、協働講座の趣旨に沿わない場合は不可



協働講座ホームページ

フチャール・休館日

6月 6/7(日)・6/30(火)	9月 9/12(土)・/25(金)
7月 7/5(日)・7/31(金)	10月 10/4(日)・10/20(火)
8月 8/10(月)・8/11(火)・ 8/12(水)・8/13(木)	



府中市男女共同参画センター「フチャール」

〒183-0034 府中市住吉町1-84 スターザ府中中河原ビル4階

042-351-4600 (代表) FAX: 042-351-4603

<https://www.city.fuchu.tokyo.jp/>

danjo@city.fuchu.tokyo.jp

開館時間：午前9時～午後10時（休館日を除く）

公式Instagram
はじめました！



@FUTUR183_OFFICIAL



①ほっとするね 緑の府中
府中市